



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンシヨン401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



下斗米先生の講演会に参加して

小川 久美子

10月26日、筑波大学東京キャンパスで行われた下斗米伸夫先生による講演会「ウクライナ戦争終結への道」は、私の待望の講演会でした。

2022年2月24日から始まったウクライナ特別軍事作戦には大きなショックを受けました。ソビエト連邦時代にモスクワで留学生活を送っていたときには、ロシア人とウクライナ人を別民族としては認識せず、日本で言えば、関東人と関西人の違いくらいに考えていました。ソ連邦崩壊で別々の国家となっても、この認識が変わることはありませんでした。

日口交流協会は、市民レベルの草の根の文化交流を旨としています。私自身も、毀誉褒貶の政治や外交には重く感じずにきましたが、守備範囲の2国家が戦うとあっては無関心ではられません。開戦後、テレビ、新聞、書籍、YouTubeと色々な情報を目にしました。ロシアの知人から生々しい話を聞くこともありました。しかし、下斗米先生の講演会を心待ちにしていたのは、ウクライナ戦争に関する、事実に基づいた学術的な観点を学べる機会だったからです。

下斗米先生は、まずはキエフ公国から現代に至るまでの歴史をおさらい、そしてアラスカ米ロ首脳会談までの交渉の成り行きを話されました。



講演の中で特に興味深かったのは、ウクライナ戦争とアメリカの国内事情との関係でした。例えば、クリントンは、1993年にNATO東方拡大を主張することで、シカゴの票を獲得しました。アメリカの大統領選挙における各州の投票傾向を見る

と、ペンシルベニアなど五大湖周辺に激戦州が集まっていますが、この地域には、19世紀末にロシア帝国内でのポグロムに耐えかねたポーランド系及びスラブ系のユダヤ人が移住しています。アメリカのローカル政治とグローバル戦略が繋がっていることが分かります。また面白いことに、この地域で鉄鋼業が盛んなのは、ロシア人とウクライナ人の共通の祖先とも言えるスキタイ人が、紀元前8世紀にクリミア周辺で鉄器を使用していたことに遡れます。

バイデン大統領時代のプリンケン国務長官、ヌーランド国務次官は、ポグロムでアメリカに逃れてきた東欧系ユダヤ人の子孫です。これに関係するかどうかは分かりませんが、ふたりともウクライナ戦争に積極的に関与しています。また、第二次世界大戦後には、ナチスに加担した150万人が西部ウクライナからカナダに移住したと言われています。この戦争には、歴史の複雑に絡んだ糸が世界的な広がりで見え、影響を与えているようです。

1993年2月発行の広報誌に掲載されているカルパチア・ウクライナでのフェスティバルに関する記事には、奇しくもその地方の歴史、民族問題の複雑さが書かれていました。島国の私たちには計り知れない歴史とアメリカの政策により引き起こされた代理戦争が一日も早く終結することを祈らずにはられません。(常任理事)

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中!

レベル別に個人、オンラインレッスンがリーズナブルな金額で受けられます。教えてくださるのはロシア人のベテラン講師陣です。見学は1回のみ可能ですのでお問合せください。継続される場合は、会員になっていただきますのでご了承ください。

●ロシア語の泉 (16)

日時: 2026年1月18日、2月15日、3月15日 (日) 13:30~16:00

講師: スニトコ・タチヤーナ

授業料: 会員7000円、一般8500円

●日本の家庭料理講習会 (4)

日時: 2025年12月14日 (日) 9:20~12:00

場所: 田町「リーブラ」2階料理室

*エプロン、布巾、タオル、持ち帰り容器をご持参ください。

*お問合せ、お申込みは交流協会事務局まで。

nichiro@nichiro.org FAX: 03-5563-0752

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

三菱東京UFJ銀行 六本木支店 普通 1077497

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org



2025年度第3回日口交流バスツアーの実施

岡崎 好典

交流ツアー部会では、10月25日(土)に2025年度第3回日口交流バスツアーを実施いたしました。今年度は、企画した第2回ツアーが参加人数不足でキャンセルとなったため、このツアーは、実質、今年度の2回目のツアーになりました。行先



は千葉県銚子方面で、ロシア人35名、日本人4名の計39名が参加されました。また、添乗員は、ラッキートラベルの山田さんと、元ロシアンカで日ロハーフの山田さんの娘さんが担当してくださり、ロシア語での案内が充実したツアーとなりました。

当日は8時過ぎに貸切バスで大使館前を出発し、11時前に銚子駅に到着しました。銚子駅からは、「ぬれ煎餅」でも有名な銚子電気鉄道に乗り、森のトンネルを抜けて犬吠駅に向かいました。乗った車両は、1969年製造の元南海電鉄2200系でした。銚子電気鉄道には、私が以前勤務していた京王帝都電鉄(現 京王電鉄)の中古車両が多く在籍しているので、個人的には、元京王帝都電鉄の車両に乗りたかったのですが、元南海電鉄の車両だったので、少し残念でした。それでも、この元南海電鉄の車両も、私の会社同期が社長を務める京王重機整備が入線に向けた改造工事を手掛けていたので、それはそれで楽しめました。また、ロシアのみなさんと地方

鉄道に乗る機会はめったにないと思うので、とても貴重な機会となりました。

犬吠駅からはまた貸切バスに乗り、犬吠埼まで行き、ドライブインで昼食をいただき、昼食後は、雨が降ったり、止んだりの天候でしたが、荒波が打ち寄せる犬吠埼灯台の周辺を散策しました。次に、北総地区で最も高い愛宕山の頂上にある「地球が丸く見える丘展望館」に行きました。しかし、その時は、雨がかなり降っており、屋上の展望スペースから眺望を楽しむことができませんでした。残念な気持ちを抱えながら、最後の立ち寄りスポット「ウォッセ21」(水産物卸売センター)に行き、集合写真を撮ったあと、海産物の買い物を楽しみました。ここには隣接して「銚子ポートタワー」がありました。こちらはガラス張りの展望室なので、そこからなら、雨天でも少しは景色が楽しめるのではないかとも思いましたが、厳しい予算のため、追加の見学は断念し、東京に向かいました。帰りは大きな渋滞もなく、18時20分ごろ大使館前に無事到着し、解散しました。

今年度は、ツアーの企画はするものの、参加人数が集まらず、実施できなかったものがいくつもあり、ツアーの継続に不安がありましたが、天候に恵まれない中でも、今回なんとか実施できたので、安堵しているところです。

(副会長)



多田麻美さん、スラバ・カロツテさんを囲んで

9月28日(日)の夕方、田町「リーブラ」でイルクーツク在住の執筆家、多田麻美さんと画家のスラバ・カロツテさんを囲みイルクーツクの現在について語っていただいた。



イルクーツクには貴重な古い建物が多く博物館もあるが、そういった美しい建造物等の修復が遅れていたり、火事が増えて失われつつある。元々芸術家の多い街だが表現活動が少し制限されたり、医療、教育は無料だが手術に時間がかかったり、スタジアムができたのに地元アイスホッケーチームのスポンサーがなくなったり、会社が減少しモスクワに人が流れて居たり、日本の中古車の部品が届かず中国車に切り替える人がいる等、スポーツ、物価等々話は多岐にわたる。それでも、コンサートやバイカル湖での展示会、オフロードラリーなど人々は頑張っている。

スラバさんも絶妙に合いの手を入れ、現地の様子が生き生きと伝わった。多田さんの著書「シベリアのビートルズ」からもスラバさんの長年の仲間たちとの活動を知ることができ興味深い。10月に下高井戸で開催された絵画展では、丁寧に描き込まれた哲学的で美しい作品を拝見することができた。

日口協会の原田さんにご紹介頂き貴重な講演会を開催できたことに感謝します。また、ギャラリー『ぎやるりでんぐり』の伝宝様や共同通信社の国枝様にもご参加いただきました。

(千葉麻里・副会長)

先日は「シベリアの風景 ～変わらないもの、変わりゆくもの～」の講演会を主催いただき、誠にありがとうございました。当日は約15名が集まり、私も母と共に参加させていただきました。小規模ながらも温かな雰囲気の中で、参加者が真剣に耳を傾ける姿が印象的で、充実した学びの時間となりました。うちの2019年にイルクーツクへツアーで行ったことがある母も「現地を思い出し、楽しく、貴重な機会であった」と喜んでおりました。

多田様のご講演では、イルクーツクでの生活や現地社会の現状を写真と資料を交えてわかりやすくご紹介いただきました。日常の困難さだけでなく、人々のたくましさや前向きな姿に触れ、「日常の中にこそ文化と強さが表れる」という言葉が強く胸に残りました。また、スラバ・カロツテ様の作品展示も心に響きました。自由で明るい作品からは元気をいただき、メランコリックな作品からは静かな余韻を感じました。ロシアの風景や人々の心が鮮やかに表現され、深い物語性を感じるひとときでした。さらに、多田様とスラバ様の掛け合いや補足説明は親しみやすく、質疑応答も誠実で、現代ロシアのリアルな姿が一層伝わってまいりました。

今回の講演会は文化紹介にとどまらず、参加者が「今のロシア」を考える貴重なきっかけを与えてくださいました。心温まる交流の場を設けていただきましたこと、改めて感謝申し上げます。今後もこうした学びと交流の機会に積極的に参加したいと存じます。今後とも引き続き宜しくお願い致します!

(矢原美沙子・会員)



第38回麻布区民センターふれあい祭りに出演

私たち「ロシア民謡を楽しむ会」は10月18日(土)に「第38回麻布区民センターふれあいまつり」に27回目の出演を果たしました。

今年は当会の創設30周年記念の年となり、ミハイル・カンディンスキー先生のご指導のもとで練習を重ねて参りました。女声陣が初めての曲「ダッタン人の踊り」の高音部に挑戦し、その他「仕事の歌」「百万本のバラ」「鈴の音は単調に鳴り響く」を披露、客席から温かい拍手を頂きました。来年も気持ちを新たに練習に励み、数少ない「ロシア語でロシア民謡を歌う」会の維持に努めて参ります。舞台を観て早速「入会希望者」も現れました。今後とも協会のご支援をお願いする次第です。(代表・田中徹)



翌、10月19日(日)、ロシア大使館付属学校の生徒たちによる「ロシアンカ」が本年も港区の「第38回麻布区民センターふれあいまつり」に出演しました。出演したのは、「ロシアンカ」の生徒23名とピアノのオリガ・カローシナ先生で、カチューシャをは

じめロシア民謡を中心とした歌と踊りのメドレーを披露しました。

今年は大きな変化がありました。このイベントの出演者は、基本的に前の週の同じ時間にリハーサルを行うことになっているのですが、ロシアンカについては、これまで私が代表して参加していただけたものを、昨年の状況を踏まえた運営側からの要望もあって、生徒・先生にもリハーサルに参加していただくことにしました。ご理解・ご協力をいただいた連邦交流庁、学校関係、そして保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

さらに、今年からは通訳のできる協会スタッフにも参加してもらい、生徒・先生とのコミュニケーションの充実と、舞台上での司会者から生徒・先生へのインタビューの円滑化をはかりました。また、当日は、清家港区長も来場され、ロシアンカを鑑賞されました。学生時代にロシア語を学ばれていたそうで、とても気に入られた様子でした。なお、ロシアンカの出演に関しては、麻布警察署に事前に連絡を入れておいたこともあり、本番当日は3名の署員が警備してくださり、安心して出演することができました。あわせて感謝申し上げます。(副会長・岡崎好典)



隣の客はよく柿食う(客)一熊だ！

大原 翔

そんな軽妙な早口言葉が、笑い話では済まされない時代になってきたかもしれない。山奥だけでなく、市街地にまでクマが姿を見せ、各地で被害の報が絶えない。今年はブナの実が凶作で、頼みの餌を求めて麓へ下りざるをえないという。スーパーの自動ドアを器用に押し開けて入ってゆくクマの映像を見るたびに、人間社会と野生との境が薄れていく感覚を覚える。

動物園では、どこかとぼけた愛嬌のある人気者だったクマ。しかし近年は「危険な存在」のイメージが前面に立ち、私たちの距離感も変わった。日本には「熊本」「熊谷」「熊野」など“熊”の字を冠した地名が多い。私は素朴にそれらの場所は「昔はクマが多かったのだろう」と思い込んでいたが、実際は動物とは無関係な由来を持つ地名がほとんどであると最近知った。

一方で、ロシアにおける熊は、日本とは比べものにならないほど、ロシア人の生活と文化の深層に根を張っている。民話には人格を与えられた熊がしばしば登場し、力強さと同時にどこか人間くささを帯びて描かれる。アニメ版の「マッシュとくま」の物語は有名である。ロシア絵画にも熊は多く姿を見せる。イワン・シーシキンの一連の《森の中の熊》は、“ロシア的風景”の原型といえよう。ロシア文学でも、多くの作家が熊をモチーフに、自然と人間、森との共生、ロシア的精神性を照らし出してきた。

20世紀に入ると、熊は政治的な象徴としても独り歩きを始

めた。1980年モスクワ五輪のマスコット「ミーシカ」は、優しさと親しみの象徴として多くの人々を魅了したが、国際社会ではしばしば“ロシア＝熊”というイメージが用いられてきた。ロシア各地の自治体紋章にも熊が描かれるなど、土地の誇りのシンボルとしても生き続けている。

一方、「ロシアが熊だと言うのは本来ヨーロッパ製の外来イメージで、主として大英帝国によって広められたこのステレオタイプには、野蛮さ、凶暴さ、愚かさ、奴隷根性といった否定的な含意が濃厚だった…(以下略)」(『ロシア文化事典』117ページ、2019年丸善出版)という指摘もある。

「内側が育ててきた熊」と「外側が作った熊」のギャップを知ることは、ロシアという国を立体的に理解するうえで欠かせないのだろう。

ふと窓の外に目をやると、隣家の柿の木が実をたわわにぶら下げている。庭のない集合住宅の高層階の私が、ここでクマと鉢合わせる心配はまずない。だが、人と野生動物の生活圏が重なりはじめている現代において、クマとの関わりを考えることは必要であろう。「隣の客はよく柿食う熊だ」ということが日常になる前に。



国際放送史研究の戯言No35

番組「極北ラジオ 樺太・豊原放送局」を視聴して

島田 顕

NHK総合・北海道で、2025年8月16日(土曜日)の午後10時から10時45分にかけて、戦時中の日本放送協会樺太・豊原放送局に関する番組「極北ラジオ 樺太・豊原放送局」が放送された。題名にあるように、樺太・豊原(現ユジノ・サハリンスク)にあった、戦前の豊原放送局の開局から閉局までの経緯を扱ったものである。この放送局では、後にモスクワ放送ハバロフスク放送局のアナウンサーとなった石坂幸子がアナウンサーをつとめていた。

実は私はこの番組にちょっと絡んでいて、番組最後のテロップに協力者として名前を出していただいた。協力者とか情報提供者というのと偉そうに聞こえるのだが、実際は一度だけ、ディレクターであるNHK札幌放送局のHさんと渋谷でお会いし、お話しさせていただいただけ。最終段階になって石坂幸子のインタビュー記事が載っていた雑誌『婦女界』をお貸ししたのみである。

この番組はディレクターのHさんの努力のたまものである。Hさんは、「豊原放送局消滅記録」などの貴重な資料や、放送博物館に眠っていた当時の放送局員の証言(音声)などを探し出した。彼の丹念な調査は本当に脱帽ものである。

番組ではCGで豊原放送局の局舎が再現され、地図でその位置が示されていた。廃墟となっているが建物自体は現在も存在していることは驚くべきことである。また豊原放送局の当時の番組内容も紹介されており、「大本営発表。我が艦隊は猛攻中にして、現在までに判明せる戦果、次のごとし」(ラジオ音声)のような大本営発表だけではなく、「番組進行表」「少国民の時間」項目で「幼なきものの旗(劇)」「戦時下独逸見たまま」など、ニュースや軍事発表、子供番組やドラマまで、幅広いラジオ番組

を南樺太の人たちに伝えたことを示している。さらに、家の中のどの辺にラジオを置いていたのかなど、当時の住民にインタビューし、豊原放送局のラジオ番組が南樺太の生活に欠かすことのできなかったものだったことを物語っている。

番組で一つだけ気になった点は、この放送局が国策で作られたということを強調しすぎていることである。国策放送は当たり前のことではなかったのか。逆に国策ではなかったラジオ放送なんて当時は存在しなかったのではないか。むしろ国策としてつくられた放送局が、南樺太の人々の生活に溶け込んでいったことは、放送の歴史の中でも特筆すべきことだろう。

それだけに、放送局の廃止は、南樺太で生活していた人々、特に局員達の運命を変えることになったわけで、涙なくして語ることはできない。連行された話、行方不明になったことなど、これらもシベリア抑留の事実の一つと言える。

その典型例が石坂幸子だったことを強調したい。だがこの番組では石坂のハバロフスク行き、そして帰国までの経緯は省略されていて、非常に残念と言わざるを得ない。ハバロフスク行きについては、石坂幸子の姪へのインタビューのみだった。帰国後に石坂幸子が米軍の尋問を受けたことは述べられていたが、結核で死にかけていたこととか、「紙の博物館」の職員になったことも述べられていなかった。石坂幸子については、番組第二弾として実現されることを期待したい。

モスクワ放送日本語番組のユジノ・サハリンスクからのプログラムとの関連など、疑問もなくはないのだが、まずは貴重な資料を探し出してくれて、大変面白い番組を作ってくれたHさんに心から感謝したい。バリショエ・スパシーバ!!

ロシアのフジヤマ

キタヤマ 忍

国内外で故郷を、あるいは日本を懐かしむ人達が富士山に似た主に成層火山をナントカ富士と呼んでいる。そんな郷土富士は日本国内に354座、海外でも優に50を超えるらしい。ロシアでは旧樺太やカムチャツカに望郷の富士が幾つももあったが、最近では新たな山が「ロシアのフジヤマ」として紹介され、特別な体験を求めるアウトドアファンを魅了している。今回はそんな山々の中からいくつかを紹介したい。

「クリュチェフスカヤ火山」

標高4835m、カムチャツカ半島中央部にあるユーラシア大陸最高峰の活火山。約7千年前に誕生し、古来より神聖な場所とされる。今年7月に噴火し、同日に発生したカムチャツカ半島沖地震と関連する可能性がある。日本にも津波警報がでた。

「イリンスキー火山」

カムチャツカ半島。富士山と同じ成層火山で、近くの



イリンスキー火山とクリル湖

湖に映る逆さ富士を楽しめると話題に。標高は富士山の半分弱の1578m。

「芙蓉山」

ロシア名・サリチェフ山、松輪富士。千島列島の松輪島にある標高1,496mの成層火山で、同列島では最も美しいと言われる。

「アルヴァクリャジ山」

南ウラル山脈の最高峰・標高1068m。ロシア連邦中央部のバシコルトスタン共和国首都ウファから直線距離約190km南東にある地方天然記念物指定。近年では「ウファのフジヤマ」(写真右)と親しまれ年間を通じて登山客が絶えない。雪山登山も人気。

「ディオニシア山」

極東チュコト自治管区アナディル地区。アナディル低地に独立する標高577mの低山ながら、ツンドラの大地が人を寄せつけ無い。先住民族チュクチ族の伝説では争いで折れた槍の先が山に。後期白亜紀～古第三紀の化石植物が発見された。(ビデオグラファー)

